

ホームページ <http://k2c2.web.fc2.com/>

メールアドレスの変更は利根川さんに連絡して下さい：[s-tonegawa@ac.auone-net.jp](mailto:s-tonegawa@ac.auone-net.jp)  
メールアドレスが不明な方へOB会報を郵送してきましたが、今年から原則としてTUWVOB会のホームページへの掲載のみとしました。郵送をご希望の方は、最後のページの事務局（8期 佐藤）までご連絡ください。

### 「旭日小綬章」を受章して

7期（昭和43年卒）上田 俊朗

小生北海道登別市に在住しておりますが、現在コンクリート製品製造業を営む中規模企業に勤務しており、社歴は来年で創業90年になり3代目の社長を卒業し、4代目を息子が継いでおります。業界では全国規模の協会の副会長を経て、現在会長補佐を勤め、業界では一応名の通った会社であると思っております。

公的には登別商工会議所会頭として5期13年勤めておりますが、地域経済発展のため商工会議所議員・会頭として長年貢献したとの評価を頂き、この秋の叙勲に際し「旭日小綬章」受章の栄に浴することができました。

11月11日に経済産業大臣から勲記、勲章の伝達が有り、その後妻とともに参内、天皇陛下へ拝謁を賜り、帰ってまいりました。

上田の父も叙勲されておりました、父子二代にわたる慶事と地元でも喜んでもらっております。しかしながら会議所議員・会頭としての活動はまったくのボランティアでありまして、費用はすべて会社持ちであり、会社や役職員には多大な迷惑をかけてきたわけでありまして、この点、学術・官界や企業活動による叙勲とは性格が違うものと思っております。

会頭職としてあと二年残っておりますが健康に気をつけ職務に精励してまいりますし、その後は今までできなかったことをボチボチ手がけていきたいと思っております。

終わりになりますがOB諸侯のご多幸、ご健勝を祈念申し上げます。

### 7期 上田俊朗（旧姓 佐々木俊朗）さんの叙勲拝受に想うこと

7期（昭和43年卒）金子 清敏

謹啓 平成26年秋の叙勲に、私共7期の主将上田俊朗さんが“旭日小綬章”を受章されました。当東北大ワンダーフォーゲル部では、かつて鈴木禄弥先生が正四位に叙せられし他に国家的に表彰される方はおられなかったかと記憶しております。

上田さんは、工学部土木学科で、来る日も毎日ひとりコツコツ黙々とコンクリートを固めては壊す破壊強度の研究に勤しみ、その結果、将来の仕事として建設関係の企業へ勤めることになりました。卒業する時に、私と真尾さん共々三人の男の約束として”将来28歳にして先ず結婚し、その後は成り行きで・・・” のとおりとなり、それがこの度の受章のきっかけの伏線であったかと思えます。それは、北海道登別市に本社を置き、道南にて躍進されるコンクリートの二次製品の販売会社を営む社長の宝である美人三姉妹の長女と結婚し、専務として迎えられたことに発します。

往時の先代社長は社是を”和”とし、更に社訓の一つとして技術の導入を海外より積極的に求め、

その業として道内の土木事業の活性化を専務に預け、その力量を凛々しく咲かせ始めたのでした。活動母体となる登別地域の温泉街を育て上げた先代社長の豪遊闊達にしての豪腕振りには、街の万人ものがその功名を知らないことは無かったことでした。

その厳格なる指導者の下に専務から副社長、社長へと研鑽にまみれての26年の間経営に精励し、ご子息が成長された一昨年（H25年）より会長職として未だ会社経営に参画するも、かつての駒ヶ岳火山災害はもとより、登別市から全道に亘る産業と観光の育成に対し、全身全霊をもって社会貢献することが会社のあるべき姿であると、処々に尽力されて参りました。還暦を過ぎてからの無理から生じた病魔にも最近打ち勝ち、高倉健さんではないが2度にも亘る背中を横切る強烈なメスの跡が、その人生を物語っております。

仕事において恒常的に学ぶという姿勢は、山を知らずしての”山行”の準備より地道に覚えたものであり、また”人を決して怒らない”その和らぎの性格は、主将としてから学び取ったのかと思います。その昔オールバックにして250cc二輪車で河内教養部へ馳せ参じた厳つい風貌から、今を誰が予想したのでしょうか。恐らくそれは、母親から知らずの内に優しさを育てられたものでありましょう。企業戦士としてそれが結婚であってもその母親を一人仙台に残し海を渡っていくことは、断腸の思いは如何ばかりであったことかと思えます。

今般叙せられたことは、昭和44年に外地（北海道）に渡り社会的に貢献された成果に対して、世間がその人を人として認めるに値された”叙勲”という形で世間に称賛され、公的に発表されたものであり、私共はそれをして上田さんを公人として尊厳し、いや認めていくばかりに他ありません。

今回の叙勲授章を最大に喜んでおられるのは、仙台の優しきご母堂かと思えます。上田俊朗さんが、この度の叙勲を拝受されたことは真におめでたく、かつ立派なことであることを7期一同心より重ねてお慶びを申し上げます。

謹白

## 7期同期会

同期会幹事 大木芳正・矢崎太造・藤森英和

恒例の同期会は富士山が世界自然遺産に登録されたことを受けて、10月3日から5日の2泊3日で富士周辺と石和温泉葡萄郷巡りで行いました。参加は合計14名でした。

初日10月3日は旅館集合として、それまでは各自それぞれ好みのコースで富士山を楽しんでもらいました。この日は全くの快晴で、暖かく気持ちのよい天気でした。伸びやかに広がった裾野から、青空に高く浮かぶ頂上まで間近にその勇姿を堪能することができました。時節柄全く雪のない富士山というところが若干物足りない印象は否めませんでした。一人聳え立つ様は霊峰と呼ぶにふさわしい優雅な姿でした。宿の部屋からは河口湖の向こう正面に富士山を見ることができました。湖面に漣が立って逆さ富士とは行きませんでした。露天風呂につかりながら夕日に赤く染まる富士山を眺める贅沢を味わうことができました。

4日は皆で富士4湖（山中湖を除いて）周遊をしました。前日と異なり曇りがちでなかなか富士山が姿を現してくれませんでした。千円札の図柄で有名なx xではしばらく頑張ったのですが、時々雲の切れ目から一部だけ姿を現してくれるのみでした。見えた部分を想像でつなぎ合わせると全体像ができるということで納得しました。意外と高く見えるのにちょっと感激でした。吉田の火祭りでは有名な富士浅間神社本宮にお参りした後、名物のほうとうを味わってから御坂峠を越えて石和に向かいました。御坂峠から雲海に浮かぶ富士を期待したのですが全く雲の中。前日すべてを見せてしまったので、この日は恥ずかしがっているのか。峠では太宰治の「富士には月見草がよく似合う」の石碑をおとすれました。

石和の宿では恒例の同期会本会。不幸にして御嶽山の噴火で命を落とされた方々に黙祷をささげた後近況報告など。今年は略還暦ですが、しばらく以前に斉藤（洋）君が亡くなった以外は、それぞれ何がしかの病と付き合いながらも何とか元気であることを喜び合いました。年齢のなせる業か、2次会は健康的な時間で終了となりました。来年度の同期会幹事は菊谷さんで、千葉で行うことになりました。

最終日の5日は台風が近づき、朝からかなりの雨となってしまいました。雨の中ぶどう狩りをした後、ワイナリーに寄ってかなりの試飲をしました。台風の接近で天候の悪化が予想され、遠方に帰る人もいることからスケジュールを早々に切り上げて帰路に着きました。



## 車山での関東在住8・9期有志OB山行

8期（昭和44年卒）水上 俊彦

[参加者] 8期：相原夫妻、根岸、水上 9期：伊藤夫妻、原田、桃谷（計8人）

我々8期は、毎年9期の伊藤夫妻が幹事をやってくれている8・9期合同のOB山行を楽しませてもらっている。これとは別に、私が参加しているNPO法人の会員の方が好意で車山のリゾートマンションを希望者に開放しているので、関東在住の人に連絡して、このマンションに泊まる有志OB山行を計画した。当初は平日を考えたが、未だ現役で頑張っている人もいたので日程調整の結果、梅雨の真っ最中の6月28日、29日の土日での実行となった。

6月28日：各自4台の車に分乗して午後4時半を目途に現地集合することにした。マンションは車山ペンションヴィレッジの一番奥にあり分かりにくいにも拘わらず、全員無事集合でき、早速ビールで乾杯。皆が持ち込んでくれた酒とつまみが豊富すぎて、この調子で飲み食いしたら夕飯が食えなくなるので、頃合いを見てすき焼きの準備にかかる。私の自宅の近くの市場で仕入れてきた100g千円の減多に食べれない(?)霜降りの牛肉に舌鼓を打つが、やはり年には勝てなくて、肉も野菜も思ったほどには食は進まない。その代わりに、酒の酔いもあり話は大いに盛り上がる。でも皆、酒も弱くなっており、夫婦2組が8畳の和室に逐次消えると、残された男性4人も10時過ぎには、LDKの絨毯のうえに持参のシュラフをひろげてどぐり込む。どこでも寝れるワンゲルの伝統はここでも生きていた。

6月29日：夜半、強い雨音に一瞬目が覚める。昨日の天気予報だと今日は梅雨の合間の青空が期待できそうだったが、やはり山登りは無理か。でも朝起きてみると、マンションの窓から霧がはれて八ヶ岳連峰が姿を見せ、そのうち編笠山の右側に富士山まで望めるようになる。ここに何回か泊まったが富士山を見るのは初めてだ。昨日のすき焼きの食材の残り、焼き肉と肉うどんを女性2人に料理してもらい、年寄りにはヘビーな朝食を取る。女性陣には昨日の夕食からの手慣れた調理、後片付けで大いに助かり、感謝、感謝だ。

9時20分にマンションを出発して八島ヶ原湿原駐車場に車を置き、相原のガイドで、晴天のもと八島ヶ原湿原経由で約1時間で物見岩につく。途中ワタスゲ、アヤメ等思いのほか多くの花が咲いていて皆の目を楽しませるが、ここから今日の最高峰の蝶々深山（標高1836m、駐車場から標高差300m）にかけて満開のレンゲツツジの群落に出会えた。車山と言えばニッコウキスゲで有名だが、それに劣らず見事だった。正午前に着いた蝶々深山頂上で、お湯を沸かしレトルトご飯、味噌汁、コーヒーの昼食タイムを楽しむが、にわか



物見岩にて（右奥が車山山頂を望む）

雲が広がり、雨が落ちてくる。帰りは車山方向に降り、車山湿原、沢渡、御射山ヒュッテ経由で、途中から雨も上がり青空が戻る中、八島ヶ原湿原駐車場に2時50分に戻る。休憩時間込みで5時間ののんびり山行だったが、皆満ち足りた気持ちで、秋のOB山行での再会を誓って解散する。最後に、解散して車の運転を始めた途端、土砂降りの雨が降りだすという落ちまでついた思い出深い山旅となった。

## 8、9期合同山行 第15回 安達太良山

9期（昭和45年卒）片野 雅至

参加者：8期 8名 相原夫妻、前田夫妻、小笠原、根岸、水上、宮下（敬称略）

9期 9名 伊藤夫妻、富川夫妻、石野、川田、原田、藤中、片野

2014年9月7日（日）、9月8日（月）

コース：1日目：11:00福島県 磐梯熱海駅集合 沼尻高原ロッジ泊（温泉あり）

2日目：安達太良山 往復（奥岳ゴンドラ利用）15:00ゴンドラ駅で解散

15回目となるOB・OG山行の報告です。卒業30周年を記念して始まった山行は、9月の初めの静かな時を選び、今年も継続。いつもの顔、顔、顔で、恒例の行事となっています。今年は、総勢17名。

夜半に関東地方に降った大雨も午前中にはあがり、集合場所の磐梯熱海駅前には暑い位の陽射し。駅前の一角には足湯があり、地元の人達と一緒にしばしの休息である。近くのコンビニで昼食の調達。さて何処で食べようか？ どこか景色の良い所でと車を連ねて走るが、結局本日の宿泊ロッジへ到着。青空のもと、ロッジ入口に設けられたバルコニーのテーブルで昼食。差し入れの恒例？となっている鶏の空揚げが、今年も食べられた。

チェックインには早過ぎるので、車で10分程登り林道終点駐車場へ。ここから山道を散策、白糸の滝展望台へ。道沿いの木に奇妙な実が生っているのを発見。なんとコブシの実との事。5月頃の白い花は良く見るが、実を見るのは初めて人が多かった。木の名前の由来は、実が人の握りこぶしに似ているからとの事。

今日の宿泊は、沼尻高原ロッジである。登山家の田部井淳子さんが設立の温泉付の宿。早速、源泉掛け流しの温泉へ。内湯は体が温まっていないと熱くて入れず、外の露天風呂へ。青空を見ながらの風呂は格別である。

大部屋に集まり、恒例の夕食前の宴会の始まりである。今回もこの集まりが一番盛り上がった。因みに、夕食後の第二弾は長旅？それとも高齢？で疲れが出たのか、何時になく早いお開きとなった。なおロッジの夕食は品数も多くおいしかった。朝食は簡単なバイキングであった。

2日目は、いよいよ安達太良山登山の日である。最高の好天に恵まれた。昨夜は早めの就寝だったので、皆朝は早い。朝食前に、露天風呂である。沼尻高原ロッジから、北側の道路経由で山の東側の奥岳登山口へ移動。あだたら高原スキー場のゴンドラ利用のコースである。全員で楽しく登るのに最適なコースである。

ゴンドラ山頂駅からは、整備された登山道で木道部分もあり、薬師岳展望台までは観光客でも行ける。その先は一応登山家の世界。少し大袈裟か。薬師岳展望台分岐を横目に、雑談をしながら緩やかな登り道を行くが、見晴らしは利かないコースである。その代わりと言う事か、山の花が出迎えてくれた。リンドウが次々と現れ、写真タイムである。仙女平分岐で左から県民の森登山道と合流すると、



ここからは展望が開け山頂方面も見えてきた。ただここまででコースの三分の一位か。道は少しずつ急になって来るが見晴らしが良いので気持ちよく歩ける。皆マイペースで歩いているので、先頭集団と最後尾集団は、かなり離れてしまった。ただ、このコースならその様な歩き方もOK。山頂と思われる所が見えてくると、しばしの登りで安達太良の南側峠に到着である。早く着いた組は、早速1700メートルの山頂を往復、のんびり組も到着で、昼食タイムとなった。昼食は沼尻高原ロッジで作ってもらったおにぎり弁当である。ちまきも入っていて、おいしかった。差し入れのリンゴと梨も振る舞われた。

ここからは、同じコースを下山。登りの時と同じ様に何組かに別れてのんびりと歩いた。ゴンドラ山頂駅に到着。お菓子等食べながら、しばしの休憩。皆がそろった所で、ゴンドラで山麓駅へ下山。来年も9月再会を約束して、ここで解散となった。

## 12期入部45周年企画 — 虎毛と川渡と仙台と

12期（昭和48年卒） 神山文範

昨年10月おでん三吉で約した佐藤教授研究拠点の川渡の旅を実現した。虎毛山行、川渡農場研修、仙台懇親の3部構成で全参加は佐藤、富井、神山。残念ながら雨宮、蔭山、江島、吉村は不参加だったが、松井、渡辺と久しぶりの藤田女史、さらに13期の小林、村野、前田が参加し、旧交を暖めた。

10月31日紅葉の鳴子経由で秋の宮温泉郷に泊り、翌1日07:20登山口発。小雨のなか赤倉沢左岸を富井森林インストラクターの岩魚と茸の話聞きながら、登山は10年振りという佐藤を励ましつつ登る。08:25赤倉沢を右岸に渡り急登となる。高松岳との分岐からは雪も少し残り風雨も強い。11:00無事視界20m弱の頂上着（左上）。頂上を越え湿原を探すが温暖化の影響か草原のみで諦め、再建された小屋で宿のお握りとカップヌードルで昼食。11:55頂上発。富井が「実践！百名山」釈由美子流下降術（横向きで足を降ろす）を佐藤に伝授し一気に下り、13:40赤倉沢岸着。雨着を脱ぎ沢沿いの道を下る。名水「虎の滴」を宴会用に汲む頃には青空も出てくる。明日も晴れるなよ？（小林と村野が登る）と思ひながら駐車場着。

雨がまた降りだした川渡温泉駅で村野を拾って川渡農場研修センターに着くと、仙台からバイクで来た和服姿の藤田が「ここ見つけるのに苦労したわよ」と出迎える。一電車遅れた松井、さらに新潟からバイクで駆け付けた小林「研修センターが北に出ないよ」「では川渡温泉駅前で」と、雨の中佐藤はさらに駅を2往復し、狸（農場の道で轢かれた蛙を食べていた）と同数？の7名が集合。夕食の学生用ジソギソコは食べきれなかったが、佐藤行きつけの旅館で温泉に入り元気回復。研修棟で13期徳富に黙祷の後、持ち込みの「伯楽星」「魔王」などで宴会（右下）。小林と村野は明日午前中晴れの予報に嬉々としてご就寝。

翌朝2人を見送り朝食後、研究室の4駆で農場研修。狭い牛舎にずっと繋がれるクーン牛の大粒の涙に驚き、3.11の放射能汚染で閉鎖され草木伸び放題の山上の放牧場を憂え（右上、虎毛方面）、ミズナラ林で「熊だな」を見学した。午後2時過ぎ、帰る藤田を見送り、4人は佐藤車で仙台へ。夜は仙台駅前「牡鹿半島」で渡辺と前田が入り6名でまたまた宴会（右下）…。13期の面々とは40数年振りだったが、すぐに昔に帰り楽しく飲み話す。次回は、来年4月に東京で再就職する佐藤の歓迎会となった。





## 第6回45期同期山行【2014年9月20日 赤城山（黒檜山）】

45期（平成18年卒）多田 忠義

メンバー：45期 雨宮、佐藤、多田、浜本、平田（夜の部から45期草野、ほか1名）

### ▼ 第6回目を数える同期山行

2008年に第1回を開催してから早6年が経過した45期同期山行。毎年の恒例行事であるものの、年々同期の居住地が東北から離れ始めているし、結婚や出産で時間を合わせるのが難しい年頃となってきた。それでも、毎年集まろうと知恵を絞って開催している。昨年第5回は、栃木県那須岳を目標としたものの、悪天のため入山を断念し、那須高原を観光した後、コテージで杯を交わした。

今年は、北は岩手、西は三重から同期の参加を実現すべく、これまで一貫して東北で開催していた同期山行を北関東エリアに南下させ、みんなの長距離移動も考慮し、山行時間が5時間程度で収まる場所として、赤城山の主峰である黒檜山に目標を設定した。

### ▼ 赤城山へ：偶然の再会も！

各地から駆けつけることを考慮し、入山口（花見ヶ原森林公園）集合時間を9時30分としたものの、関東おなじみの渋滞にはまり、多田が遅刻（申し訳ない）。それでも、足並み揃ったメンバーなので、標準タイムを上回るペースでサクサクと登る。

頂上では、佐藤が隠し歩荷を振る舞ってくれ、アルコールフリーのビールで乾杯。まったりとくつろいでいると、36期の竹内先輩とばったり遭遇。先輩はツアーガイドとして仙台周辺のお客様とご一緒であったため最初は半信半疑だったが、久しぶりの再会で旧交を温めるひとときとなったことが印象的であった。その後、写真の通り、山頂で記念撮影。下りも登り同様、快調なペース。佐藤は、昨年故障した足に不安を抱えての登山となったが、今回の登山で一定程度の回復が見られたようで、何よりであった。



### ▼ 来年も開催を予定

下山後は、水沼温泉で汗を流し、みどり市で夕食を買い出した後、わたらせ渓谷・沢入の貸別荘（ウエルジュ）に一泊した。閑静な場所にある施設で、部屋も多く、調理設備も整っているの、我々のような人数で、自炊ベースに思い思いに過ごすのにちょうど良かった。各々、人生の節目を迎える報告が相次いだほか、第一子、第二子懐妊の報告など、近況報告はつきなかった。夜の星空はとともきれい。来年は、雨宮が幹事となり、第7回の45期同期山行を日本のどこかで開催する予定である。来年の同期山行が早速待ち遠しい。

## 年間山行日数の更新を目指して

2期（昭和38年卒）池田 幸男

5万分の一の地形図と磁石・案内書を片手に、奥武蔵や奥多摩の丘陵地帯や低山を歩き始めたのは中学生の頃。その後TUWVを経て、紆余曲折を経ながらも何とか歩き続けて60年。一方、20年ほど前に転勤で富山に赴任してきたが、12年前にリタイヤした後も、絶好の「山歩き環境」に魅せられてそのまま住みついている。

昨年はTUWV卒業後50年ということもあり、地の利を生かして秘かに狙った「生涯記録の更新」があった。狙った記録更新のアイテムは、「年間山行日数」。勿論、体力・気力の衰えは目を覆わんばかりで、唯一の武器は「暇」である（笑）。おぼろげな記憶によれば、TUWV時代の記録は105日である。残念ながら、昨年は遠く及ばず敗退した。

今年は気合を入れ直し、ひたすら「日数稼ぎ（笑）」に精を出して11/30現在で118日となり、既に記録の大幅更新ができた。しかしその中身の実態は、「山行」というより「山遊び」だ。

1～4月は、500m～1200m位の里山でのカンジキハイク。それでも富山の若い山仲間「池田さんは目標です」なんて煽てられ、応分のラッセルをこなすこともある。軽い所では朝10時ころ家を出て、先行者や前日のトレースを使わせてもらって昼には劔岳を見ながらのビールつきランチタイム-----、これがまたこたえられない（笑）。それでも「山遊び日数1日」だ。

4～6月は、フキノトウ、コゴミ、タラ芽、コシアブラ、ワラビ、タケノコ（根曲がり竹）などの山菜採りを兼ねた山遊びだ。といっても、急斜面での藪こぎ強いられることも多い。「採るのが楽しみ」という感じで、大部分は近所に押し付けている。

9～11月は、キノコ（もっぱらなめこ）採りのこれまた山遊び。去年・今年と大豊作で、近所中に配りまくった。

12月は、そろそろ楽しみにしているカンジキハイクのシーズンが始まる。まあ本当に山行日数と言えるのは、せいぜい20日くらいなものだろう（笑）。

もう20年以上昔、口の悪い友人から「池田は将来絶対徘徊性ボケ老人になる！」と予言（？）されたことがある。今でもカミサンから「今日も徘徊ですか？」とか、「ローソクが燃え尽きる寸前に一瞬パッと燃え上がる。そんなようなもんでしょ。」と言われている。そのとおりかもしれない。それでも、70代半ばでこれだけ歩けることには、本当に感謝している。これも、TUWV4年間のお蔭か？（笑）

来年は、75歳以上はリフト券がタダになるスキー場が近くにあるので、3年位やめていたスキーも復活するつもりだ。他に借りている40坪ほどの畑での野菜作りもやっているし、年を取っている暇はないかもしれない。

**写真1**：「新雪の立山」 この11月21日に、年賀状用写真を撮りに行った時のもの。4月中旬から11月末まで運行のバス停から、2時間半くらいでここまで行ける。勿論ある程度の経験・装備は必要。

**写真2**：「カンジキハイカー」 この日（3月）は真面目に歩いた。風が強いので要塞を築き-----。  
（背景の白い山並みは北アルプス）

**写真3**：「カンジキハイカー」  
要塞の中では宴会だ（笑）。  
山に雪のある12月～5月に月1回、最大で15人（この日は10人）ほど集まるメンバー。向かって左側の列の手前から2人目に、ダントツ年長さんの僕がいる。





## 山に登るニホンジカ

4期（昭和40卒）小原 佑一

車を美濃戸に駐いてダラダラとした柳川の北沢を赤岳鉱泉まで辿る。ここから道は硫黄岳の急な登りとなる。この斜面を下ったのは30年くらい前の積雪期だったのだろうか……、美濃戸口から阿弥陀の西稜を腰までのラッセルをし、赤岳、横岳、硫黄と縦走した後、赤岳鉱泉経由で下山。その時はここを下ればほぼおしまいとホッとした気持ちで下った。でも、今回は昔と違って、夏の日帰り山行なので荷物は軽いとは言え登りはしんどい。歳を感じる。

森林限界を超え、視界が開け硫黄から横岳に続く八ヶ岳の縦走路がよく見えてくると少しは楽となる。硫黄の山頂から北側の火口壁の先を望むと、数年前、冷たい風と曇の中入った日本一海拔の高い露天風呂といわれる本沢温泉の湯船らしきものがガレ場に見える。

2万5千の地形図によれば硫黄岳一帯は「八ヶ岳キバナジャクナゲ自生地」と記載されており、キバナジャクナゲ以外にコマクサなど多くの可憐な高山植物が咲く高山帯である。コマクサのシーズンは終わりに近くほとんどは色あせて枯れた花が多かったが、まだ少しは「駒草」の名前どおりに馬面の長いピンクの花も咲いている株を見ることが出来た。

縦走路に沿って両側には登山者の立ち入りを規制するためのロープが張られている。しかし、硫黄岳石室の縦走路を挟んだ西側斜面には規制ロープに加えて電気柵が！（写真 1）

さらに縦走路を進んで横岳に近くなると電気柵に加えて鹿被害防止のネットまで。（写真 2）

最近ではニホンジカが増えて山の上まで登ってくるとは聞いていたが森林限界を超えて高山植物のお花畑までとは、森林限界を超えた高山地帯といえば「ニホンカモシカ」のイメージだったのに……

最近の電気柵はソーラーパネルとバッテリーを組み合わせた維持管理が簡単なシステムがあるのか。それにしても山の急な斜面に杭を打って電線を張り巡らせて設置するのは大変なことだろう。電気柵といえば屋久島で見た「感電注意 人も猿も触ってはいけません」と猿にも向けて注意喚起した（？）看板を思い出した。（写真 3）

横岳、赤岳と八ヶ岳の縦走路のメインを歩いて行者小屋から南沢経由で美濃戸の駐車場まで戻ってくると道路脇でニホンカモシカがのんびりと草を食べていた。ニホンジカと違ってカモシカの方が図々しいのか人をあまり恐れないようだ。害獣として狩猟の対象となるニホンジカと特別天然記念物として手厚く保護されているニホンカモシカの差かもしれない。

それぞれ生息数の増加によりニホンシカは低山帯から人里または高山帯への移動、ニホンカモシカは低山帯への下降移動が著しいようだ。

八ヶ岳の裾、茅野市周辺では山麓に開発された別荘地が禁猟区になっていることもあってニホンジカの安全地帯になっているようで夜になると別荘地から周辺の過疎集落の農地に出てきて田畑を歩き回って荒らしていくようだ。（写真 4）

2007年まで法律で雌は狩猟禁止だったのでニホンジカ全体の生息数の減少にはあまり役立っておらず、最近法改正で捕獲数が増加したといえ、今の割合でいくと2025年には現在の生息数の約2倍、

500万頭にまで増加すると推定されている。この数値にはハンターの高齢化等は考慮されていないと思われる。美味しく、安く、何時でも手軽に安心して鹿肉を食べられるシステムを作って、鹿の生息数をコントロールできれば農作物、森林被害を抑えることが出来るかもしれない。



## 静岡県越前岳と山梨県日向山

6期（昭和42年卒）加藤 邦明

### 1. 花咲く愛鷹山・越前岳

40万年前に噴火した火山としての裾野市の愛鷹山は、富士山の展望の良い越前岳が最高峰である。7:30に登山開始。丸太の横たわる階段をひたすら登って見晴台ーアザミとマーガレットのようなノースポール？が咲くートリカブト発見ー左手の藪からキジが飛び立ったー馬の背(標高 1,098 m: 笹峰: 晴れなれど富士山は見えぬ)ーリンドウ、菊のようなエゾゴマナが群生、黄色 5 弁のニガナが咲くー対岸に鹿を見たー足元が笹になるーガスの中ー勢子辻への分岐ー越前岳 9:25(標高 1,504. 2m、霧で眺望 OUT: 二等三角点)。9:40に下山開始。何人かの登山者に会うー馬の背(三等三角点)ー駐車場へ戻り 11:11(曇り/小雨)。

### 2. 展望の日向山

甲斐駒ヶ岳、日向山を含む山体は、約1,200万年前に固まった花崗岩で形成されている。北杜市の日向山へは、矢立石: 日向山登山口駐車場から登った。駐車スペースには20台位は駐車できる。日向山登山口11:00ー10分の幾つで示される標識を見ながらノンビリ登るー日向山三角点 (1,659. 6m。樹木が茂っていて見通し悪い)ー雁ヶ原に到着した(12:43/晴れ)。比較的歩きやすい初心者向けのコースであったが、八ヶ岳の遠望と、足元神宮川沿いのマサ土の景色は素晴らしかった。山頂では地元小学校4年生の遠足に会った。昼食後、登って来た道を辿り、矢立石駐車場には14:03に戻った。



霧の越前岳



展望の日向山

## 大きな宝物

7期（昭和43年卒）真尾 征雄

高校では山岳部、大学ではワンダーフォーゲル部で青春を謳歌していた。キャンプサイトのテントの中で、あるいはファイヤーを囲んで、山の歌・ロシア民謡・歌謡曲などを歌っていた。美しい響きとは無縁の蛮声を張り上げて。楽譜を見ても分からなかったが、自然と耳から聞いて歌っていた。高音が出ないので、高い音はオクターブ下げて平気で歌っていた。クラシック音楽を聴くことは好きで、会社に入って最初のボーナスで買ったのはパイオニアの音響セットで、寮の部屋で聴いていた。

下の娘が、何がきっかけか分からないがオペラ好きで、その影響でオペラのVHSを観たり、CDを聴いたりすることが私も好きになった。好きにはなったがオペラはまだまだ遠い存在だった。定年を過ぎたある日、近くの市民センターに家内の書道教室の展示会を見に行ったら。隣接の体育館では様々な発表会をしていたので、覗いてみた。暫くすると、かなり高齢に見える男声合唱団が揃いのブレザーで登壇し、若々しい張りのある声で歌を披露し、最後に原語でオペラ「ナブッコ」の合唱曲を歌った時は驚いた。こんな年寄りの集まりの合唱団がオペラの曲を歌えるのかと。翌週その合唱団の練習を見に行ったら。楽譜を読めなくても大丈夫と言われ、即入団してしまった。合唱団の名は「いずみオッチェンコール」、パートはバスと言われた。

2012年オペラ「遠い帆」の合唱団員募集があり、オーディションを受けたら、信じられないことに合格してしまった。それから2年間、毎週土曜日、夜の練習が続いた。支倉常長一行の苦難の旅がテーマだけに、暗さ・嘲り・怒り・うねり・罵り等の場面が多く、帰路はいつも暗い気持ちになった。練習にもついていけず、やめようと何度思ったことか。友人達に、「東京でオペラをやるから見に来てね」と言った手前、やめられなかったのかもしれない。

2014年8月24日、東京新国立劇場中ホールで自分は立っていた。客席には、ワグネルの仲間が沢山来てくれていた。「オペラは初めてだが、真尾が出るのだから見に行ってみるか」という冷やかしの声もいた。舞台上で転ばないことと、口をしっかりと開いて言葉を正確に伝えることだけに注意して舞台上に立ち、演じ終わった。カーテンコールを受けている最中、良くここまで来れたなという達成感と満足感、そして2年間の苦難の道を思い出していた。自分にとっては二度と立つことはない新国立劇場でのオペラ公演。この経験は人生の大きな宝物となった。



「遠い帆」カーテンコール

## 孫たちのハイパーフィールド

8期（昭和44年卒） 相原 敬

自分の子供を育てる頃は諸事に明け暮れて山に登るという習慣がなかった。子供を山に連れて行く気がないから簡単な装備すら持っていなかった。少年サッカー以外のアウトドアと言え、春の野のワラビ狩りやスキースケートといったウィンタースポーツに限られていた。

50歳を過ぎて山に登るようになり、当時3歳を迎えた初孫を山に連れて行きたい衝動に駆られた。



3歳の子もいつの間にか小6になり、その間に彼は20回の山登りをこなして貴重な経験ができたと思っている。私の倅夫婦は共稼ぎなので、小学校の春休み夏休みには群馬のお婆ちゃん家に兄弟揃ってお客に来るのが年中行事。そんな時は決まって「山に登って遊べる」という期待を抱いてやって来るのだった。家の中でパコパコやっている今時の子供にとって、山は超刺激的なハイパーフィールドであるに違いない。私たちとしては絶好の教育の場として捉え、彼らの将来の足しになることを願って頑張っている。



孫を連れて歩くのは楽しいものだ。とにかく賑やかだし繰り返すパフォーマンスも多彩で飽きさせない。ただ、知識と経験のなさからくる無鉄砲で危険極まりない行動に、声を荒げて注意することも多い。小学生と言えどもパワー溢れる子供だから体力的には不安はないが、安全面から自ずと山選びは制約される。

これから花も恥らう中学生になれば、今までのように付き合ってもらえなくなるかもしれない。が、来春には新たに二人が小学校に上がるし一番下の孫は今年3歳だから、まだまだ在庫は充分ありその気があれば10年くらいは楽しめるだろう。



## 日本の大岩壁を登る 唐幕・畑山ルート

8期（昭和44年卒）佐藤 拓哉

北アルプスの唐沢岳・幕岩（通称「唐幕」）と言ってもどこにあるか知っている人は少ないであろう。表銀座として人気のある燕岳の北に、訪れる人が少ない餓鬼岳（1年生の夏合宿で初めて登った北アの山頂）があるが、唐沢岳は更に北にあり、登山道すらない。そんな山でも、日本のアルパインクライマーの憧れの大岩壁がある。この岩壁は、谷川岳、穂高岳、劔岳などの岩場を経験したエキスパートのための岩場と位置付けられている。

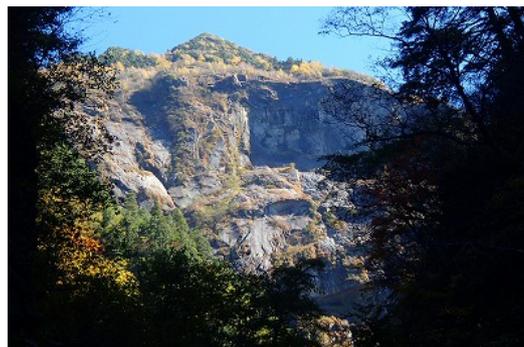
10月の中旬、紅葉が綺麗な時期に唐幕を訪れた。これまで唐幕で他のパーティーと一緒にになったことがなかったが、今回もこの大岩壁にパートナーと二人きりであった。大岩壁の登攀は痺れる程エキサイティングであるが、大岩壁の基部にある岩小屋（大町の宿）で、焚き火を囲みながら過ごす静かな夜は、他の岩場にはない魅力である。

七倉から先は車両が規制されており、高瀬ダムの下まではタクシーで入った。そこから沢を2、3時間遡ると、大町の宿となる。ここには冬でも凍らない湧き水もある。星空が明日の晴天を約束してくれていた。

明け方は寒いので、いつもより遅めに出発した。それでも北向きの岩壁には陽が当たらず、寒い。染み出しで岩が濡れていると思ったら、ベルグラ状態となっている。寒いはずである。

岩を掴んでいると、あっという間に手の感覚がなくなってくる。手を暖めながらの登攀は時間がかかるが、どうしようもない。

2ピッチ目がルートの核心部である。右の写真のように、ハングを越えて左側の垂直のフェースに出て直登し、さらに小さなハングを人工登攀で越えていく豪快なピッチである。



その後は、草付き状態のレンゼ状やブッシュの多いフェースなどを登る、いかにも日本的な岩壁の登攀が続いた。すぐ隣には、乾いた気持ちの良さそうなフェースがあるにも拘わらず、である。

そのまま登り続けると上の方でビバークとなるので完登を諦め、途中から懸垂下降した。登攀時の2ピッチ目は、ほぼ50mの空中懸垂となっていた。



## 御嶽山噴火に寄せて

9期（昭和45年卒）片野 雅至

地元の山 御嶽山の噴火は、私には本当にショッキングな出来事でした。所感を述べたいと思い、投稿させていただきます。

2014年9月27日（土）の噴火では10月17日現在で、死者57名、不明者6名となっています。戦後最悪の火山災害となってしまいました。

結論から申し上げますと、他人事では無かったなと強く感じた次第です。卒業と同時に名古屋本社のメーカーに就職した関係で、以来40数年間、一貫して名古屋(春日井)に拠点を置いた生活でした。定年退職した今も名古屋です。そんな中で、御嶽山は本当に身近に感じる三千メートルの名峰です。会社のワングル仲間と、また家族で、長野県側からも岐阜県側からも登りました。子供を連れて山麓でのオートキャンプや、御岳スキーなどにも通いました。また、特に冬には、澄み切った青空に真っ白な姿を見る事が出来ます。

御嶽山は、名古屋からのアクセスの良さもあって、日帰りの登山も可能です。この地域の人々には、本当に親しみのもてる山であったと思います。初心者でも皆と登れば、行けます。現に小学生も登って、噴火の犠牲になってしまいました。

そんな山で噴火、しかも最悪のタイミングでした。紅葉の始まる季節、好天の土曜日、そして皆が山頂に到着出来る昼時でした。最近では、三千メートル峰の登山は、日帰りでは少し厳しいなと思いつつも御嶽山なら、もし誘いがあったら出掛けていたかも・・・。

本当に他人事では無かったなと強く感じた次第です。最後に、自然の脅威に犠牲になった人々の冥福を祈り 合掌

## 秘境ギアナ高地を旅行して

10期(昭和46年卒) 田中康則

今年は南米ベネズエラの秘境ギアナ高地です。恐竜の生き残りがいるかもしれません。

8月9日お盆で賑わう成田空港を出発。アメリカのダラス空港へ。近くのホテルで一休み。夕方ヒューストン経由で、早朝ベネズエラの首都カラカスへ。

8月10日飛行機を乗り換え、ギアナ高地の玄関口プエルト・オルダスへ。ここで昼食。3台のワゴン車に分乗してワシパティへ。途中のレストランでトイレ休憩し、カチャパをつまんだ。ワシパティの民宿では、中庭でピザとビールで夕食。シャワーをあげ、ゆっくり寝ました。これで時差ボケがとれたようです。

8月11日いよいよ観光開始です。途中からカナイマ国立公園に入りました。グランサバナの看板があるところで写真ストップ。(標高1440m) いよいよチナクの滝へ。(アポンワオの滝とも呼ばれています。) グランサバナで一番大きい滝です。20分程小舟に乗って、更に10分程歩いて行きます。迫力ある滝でした。ゆっくり見学した後、昼食。テプイを見ながらチバトンのロッジに到着。



グランサバナの看板で



チナクの滝にて

8月12日昨日の道に戻り、更に南下し、トイレ休憩後、カマの滝へ。次にはパチェコの滝へ。ここでは私も含めて、何人かが泳ぎました。今日は天気が良いので、早めにロッジに向かうことにした。サンフランシスコという街で昼食。今日もチキンでした。明日の予定を早めて、ロライマ山へのヘリコプターフライトの為、急ぎパライテプイ村へ。午後2時過ぎにヘリコプターが到着、無事3回ヘリコプターフライトを終えることができた。ここのロッジで過ごした一日は最高の日でした。満天の星空、満月、御来光と。



パライテピのロッジで



ロライマ山の頂上で

8月13日ロッジを出発する頃には、ロライマもクケナンも雲の中へ。予定を変更した事は正解だったようです。最初はユニアルの滝。更にハスペの滝へ。ここは有名な観光地で地元のベネズエラ人やブラジルの観光客等で賑わっていた。次はサンタエレナです。昼食はバイキングスタイルのレストラン。午後はブラジルまでドライブ。ホテルで夕食。



ユニアルの滝にて



ハスペの滝にて

8月14日旅行の前半は終了し、後半の開始です。サンタエレナ空港よりセスナ機でカナイマへ。残念ながらエンジェルフォールは雲の中でした。まずはカナイマ湖をクルーズ。いよいよウカイマ港へ。ここからカラオ川、チュルン川を遡るボートクルーズです。途中のマユパの早瀬で昼食。30分程歩いて、再びボートクルーズ。5時間近いアドベンチャークルーズを楽しみ、エンジェルフォールのキャンプ地に到着。夕食はビールとチキンで。この日はハンモックで就寝。登山経験の多い私には問題なく熟睡できました。

8月15日雨の中、エンジェルフォールの展望台までハイキング。残念ながら雨ですっきりとは見えませんでした。下山して昼食。みんなで記念撮影した時には姿を見せてくれました。再びボートクルーズでカナイマへ。途中サポの滝を見学。滝裏ウォーキングは水着で。ホテル到着し夕食。



ボートクルーズでキャンプ地へ



エンジェルフォールの展望

8月16日今日はエンジェルフォールを見る最後の日です。3組に分かれ、セスナ機で遊覧飛行をしました。滝もよく見えました。その後はチャーター機でプエルト・オルダス空港へ。スーツケースを受け取りサンドイッチで昼食。その後1時間以上遅れの飛行機でカラカスへ。ホテルの部屋はカリブ海が見える部屋でした。夕食はホテルで。

8月17日カラカスから帰国の旅です。マイアミへ。システムダウンで入国に時間がかかり、夜10時頃に空港内のホテルへ。皆で遅い夕食を済ませた。

8月18日マイアミ空港からダラス空港へ。ダラスで乗り換え成田空港へ。

8月19日午後4時半頃成田空港に到着。成田エクスプレスで品川から自宅へ。無事旅行を終えました。次は今年の正月にキリマンジャロ登山を予定しています。

## 11期（昭和47年卒）・「第一の仕事人生」からの卒業記念同期会

11期（昭和47年卒）鈴木 元昭

11期のメンバーは、65歳前後の年齢になりました。大学卒業後は、みんな仕事に集中し、わき目も振らずに仕事人生を走り抜けてきました。そして現在、ほとんどのメンバーが「第一の仕事人生」を終え、それぞれの道を歩んでいます。

これまでに2回集まりました。

40歳を過ぎて少し仕事生活に余裕ができてきたころ、**丹沢に集まってキャンプをしました。1992年のこと**でした。たき火を囲いながら夜遅くまで語り合いました。

**2010年、還暦を迎えたときにも集まりました。**伊豆の宿で、各人それぞれの人生が語られます。みんな「凄い人生」を過ごしてきたのだなあと思うとともに、友のありがたさを深く感じました。

そして今回、**2014年、仕事人生を卒業する仲間が増え始め、「集まろう」ということになりました。**近田が幹事を引き受けてくれました。集合場所は仙台郊外の泉ヶ岳の麓。泉ヶ岳温泉の「やまぼうし」という宿です。3名は仕事の都合で参加できませんでしたが、8名が集まりました。秋田、柴田、竹内、近田、仁藤、真鍋、横川、元昭です。

仙台駅から泉ヶ岳温泉に向かうバスの中から、懐かしい山々が見えました。夕陽に浮かぶシルエット。青春時代をすごした場所です。二口山塊、蔵王連峰、泉ヶ岳。当時は、いつでも「重い荷物」を担いでいました。

夕暮れに、宿に着きました。温泉に入り、18時から宴会が始まりました。

今回は、途中で部活をやめていったひとりの仲間（野口）が初めて参加しました。彼の人生が「今回のサプライズ」でした。工学部を卒業して新潟鉄工所に入ったのですが、彼は会社の将来を見切り、転身したのです。なんと、大学に入りなおし、医者の資格を取りました。そして、いま、秋田県能代市の病院の院長をやっています。

その事実をその場で、初めて知りました。

驚きましたねえ。なんとという人生の転換。「すばらしい」の一言です。彼が医者になったのが1990年ですから40歳のときでした。

宴会終了時間の20時半は、あっという間に過ぎていきました。

場所を移して語り合います。各自の人生、古い記憶、いまの悩み、これからの人生が語られます。ハッと気がつくと午前2時を過ぎていました。8時間以上も語り合っていたことになります。古い仲間との語り合いというのは、そんなものなのでしょうね。**とてもいい時間**でした。

下の写真は、35年前（30歳のころ）の我ら（左の写真）と現在の我ら（右の写真）です。6名、同一人物が写っていますが、読者諸君には分らないと思います。

「時間は人の外観を大きく変えます」。でも、「人間の本质や性格はまったく変わらない」ということも**事実**です。今回、そのことを強く感じました。



## 徳富の遭難

13期（昭和49年卒）岡部 安水

13期の徳富昭一郎くんが吾妻連峰で遭難し、帰らぬ人となってしまいました。徳富は、昭和45年に入部し、途中でクラブを辞めましたが、TUWV13期の仲間の一人です。

徳富は、5月31日に単独で吾妻連峰東麓の仁田沼から入山し、日帰りで浄土平、高山を經由して戻る周回コースを予定したようでした。たまたまご家族が留守のときに出かけたため初動が遅れたこともあってか、捜索は難航を極めました。6月初旬には延べ100人弱の体制での捜索が行われましたが、発見できませんでした。その後ご家族を初めとして、TUWV・OBの仲間も加わった捜索活動も行いましたが、みんなの願いも空しく、発見には至りませんでした。

ようやく9月になって、茸採りの地元の方によって発見されるに至りました。高山の南東約2kmの崖沿いの沢で、ほぼ白骨化した状態で、沢に流されたためか広い範囲で見つかり、DNA鑑定の結果本人に間違いないと認められたとのことでした。

10月19日に仙台でお別れ会が開かれました。ワンゲル関係者20名を始め、御親族、医療関係者等、会場に入りきれないほどの多くの人が集まり、徳富の親交の広さや活躍の大きさ、人徳を偲ばせるに十分なお別れの会でした。会場には、徳富の山行記録や写真なども展示されていました。

記録によると、ここ何年かは年間20～30回以上の山行をこなしていましたし、ご家族とも一緒に頻繁に山を楽しんでいた様子が残されていました。山行記録が、概念図とともに几帳面な文字でヤマケイダイヤリーにびっしりと書き残されているのを見ると、改めて徳富の元気な頃の姿が思い出されて、思わず目頭が熱くなってしまいました。

われわれ同期の在仙の要として、同期会の幹事を率先して引き受けてくれるなど、どれほどお世話になったか計り知れません。今はただ徳富が安らかに眠ることを願うしかありません。掛替えのない友を山で亡くしてしまいました。お別れ会において読み上げた弔辞を以下に載せさせていただきます。

## 弔 辞

6月8日に徳富が山で遭難したという第一報を聞いて、山に対して謙虚であれほど慎重であった徳富がまさか、間違いであってくれという思いでいっぱいでした。しかし残念ながら、今日こうやって弔辞を読むこととなってしまいました。

私は、人生で初めて読む弔辞がこんな形で現実のものとなるとは、夢想だにしませんでした。本当に残念で悔しくてたまりません。

徳富とは大学のワンダーフォーゲル部で一緒になりました。たまたま徳富が下宿していた仙台のお寺の離れに空きが出て、クラブの友人とともに引っ越して、以降卒業するまで6年余に亘り同じ屋根の下でともに学生生活を送りました。下宿での徳富は、いつも沈着冷静で、お寺にこもってまさに学生の本分である学問に打ち込んでいるといった風情があり、山登りに熱中していた私にとって、少し近寄りたがたい雰囲気もあったように思います。

クラブでは、どういうわけか同じパーティーで山に登ったことはありませんでした。先輩のある方

から、その方は1年先輩で上越での夏合宿でリーダーを勤めた方ですが、「2年生の徳富が重いキスリングを背負い平が岳から荒沢岳への縦走での藪漕ぎを頑張っていました。荒沢岳の頂上を前に、足を怪我されましたが、頑張って荒沢岳を登り、銀山平への急な山道を降りられたことをよく覚えています。」という話をお聞きしました。大変な頑張り屋でありました。

現在ワングルの仲間では何年かごとに集まって、山に登るなどして旧交を温めています。これも7年前に徳富が音頭を取って、また何から何までの段取りも整えてくれて、鳴子の川渡温泉の旅館を借り切って集まったのが始まりでした。とても心優しく、面倒見の良い徳富でした。

一昨年の10月のその集まりで、那須で会ったのが徳富と会った最後になってしまいました。その折は、那須の最高峰の三本槍岳の山頂で、会津側からのコースをご夫婦で登ってきた徳富を迎える形になりましたが、頂上についてほっとしたそのときの徳富の笑顔は忘れることができません。

徳富遭難の報を聞いて、ワングルの仲間たちも微力ではありますが捜索のお手伝いをさせていただきました。私は残念ながら参加できませんでしたが、手がかりの少ない中、ご家族の皆様が何日にも亘って献身的な活動をされていたことをお聞きしました。捜索のお手伝いをした仲間からは、「ご家族が徳富さんに寄せる想いを感じ入りました。」という声や、「ご家族の捜索への熱意には頭が下がるばかりです。藪にも飛び込める立派な娘さん達を育てたものだ、改めて感心しました。」という声を聞いています。また、困難な状況にもかかわらず、参加した仲間たちへの細やかな気配り、心配りが準備段階や現地での捜索の様子を聞いていると強く感じられました。徳富一家の皆様の強さと暖かさに心打たれるばかりです。

徳富、本当に残念で名残はつきませんが、これでお別れです。どうぞ安らかにお休み下さい。そしてご家族の皆さんや私たち仲間をどうぞ温かく見守っていて下さい。

さようなら、そしてありがとう。 合掌。

## 同期 嶋田和彦君を偲ぶ

15期（昭和51年卒）堀江 博

2014年5月25日 15期（S51年卒）の嶋田和彦君が60歳の若さで、逝かれました。

3月から公私とも連絡がつかず、不安を感じていたところ、4月15日、嶋田君から、「2月から病氣療養中、・・・だ」との突然の電話がありました。最初に見舞った日、嶋田君がいつもの様に、右手をちょっと挙げ「ヤァ」と挨拶。抗がん剤治療を受けているとの事で、快方を期待していました。しかし、同期のA君、E君の3人で、西東京市の自宅に見舞いに伺ったその日の夕方、愛妻 壽美さんの献身的な看病も叶わず、愛妻一人を残し、帰らぬ人となりました。安らかな顔でした。

嶋田君は、部活動では、主務を務め、控えめながら、わがままな我々を、良くまとめてくれていました。41年前の2年生の秋合宿、リーダー、サブリーダーとして登った「平庭高原のヤブ漕ぎ」が、今も鮮明に記憶に残っています。

クラブ活動と共に勉学に励み、優秀な成績（お世辞ではありません。）で法学部を卒業。メーカー志望で、1976年、(株)小松製作所に入社。小松市の栗津工場での勤務の後、米国ペンシルベニア大学に留学 1983年にLLMを取得し、国際法務のプロとして、勤務されていました。その後、NTT関連企業に、転職しましたが、国際法務のスペシャリストとして、国内はもとより海外でも活躍され、バリバリの現役でした。

我が同期も、皆60歳を超え、これから、現役時代以上に楽しもうと思っていた矢先の死。悔いなく、人一倍働いた人生でしたが、言葉になりません。

9月には、同期の連中で「偲ぶ会」を都内で行いました。翌日、M君と、成田市の霊園で両親と共に眠る嶋田君の墓にお参りをしました。一人欠け、とても寂しいのですが、これからの行事、嶋田君も参加していると感じながら行くことになっていると思っています。

またな、「嶋田」。



昭和50年 北面白山山頂にて

## 飯豊連峰石転び沢 (21、22期)

21期 (昭和57年卒) 富士原 康浩

毎年、「今年で沢は最後かな」と思いつつも、沢への執着から離れられないため、今回の夏合宿は、「飯豊石転び沢」に行くことにした。特別ゲストとして何度か我々と山で寝食を伴にしている「山ガール」で医療関連雑誌の美人記者、久保田嬢が同行することとなった。

7月18日 (金) 梅雨前線が停滞しているなか、山行を中止するかどうかの判断に迷ったが、決行することとした。米沢で前泊し、駅前の焼肉屋で、手塚の技術研究所所長就任祝いを盛大に挙行。やっぱり米沢牛は旨い。

7月19日 (土) 米沢駅5:57発で小国へ。米坂線の一部区間 (羽前椿～小国) が土砂災害で不通のため、今泉駅から代行バスとなる。8:00小国駅着、天気は雨。予約していたジャンボタクシーで飯豊山荘へ向かう。雨は小ぶりのため、「石転びを諦め、梶川尾根に切替えよう」との提案もあったが、「どうしても石転びを登りたい」との意見が大勢を占め、初日から飯豊山荘に「停滞」する。早速一風呂浴び、来る途中で安く仕入れたビールを飲み、トランプ (大貧民) に興じる。我々は、素泊まりのため、Lはソーメン、Dはレトルトカレーを食す。何度も温泉に浸かり、酒を飲み、「停滞」を満喫する。後で分かったことだが、BS-TBS「日本の名峰」取材クルー9名が同宿していた。部屋割はあうんの呼吸で決まったようだ。

7月20日 (日) 3時起床、4時出発。天気晴れ。山荘を出るとすぐに車止めゲートがあり、警察官が待機している。予め、用意していた登山届を提出。林道は堰堤を過ぎると本格的な山道となり、アップダウンを繰り返しながら沢筋を進む。入門内沢合出に8時着。いよいよここからワングルらしく1本締めアイゼン・ウッドのピッケル・傷だらけのヘルメットを装着し、革の登山靴で石転び沢を進む。

主稜線にカイラギ小屋が見える。ところどころに石があり、落石があったことがわかる。標高が上がるにつれ、傾斜がきつくなっていく。いよいよもうすぐ「中の島」という時にガスで視界が遮られる。踏み跡と高度計と方位を信じて進むと、上部からの下降者に遭遇し、無事「中の島」の取り付きに、到着。最も危険で傾斜のきつい7mのトラバースを終え、小屋に向かって進む。

本日の予定は、御西小屋まで行くつもりだったが、13時を過ぎていたため、カイラギ小屋泊りとする。早速、無事の登頂を喜び、ビールで乾杯! 天気も回復してきたので、北股岳方面に散歩に出かける。高山植物が真っ盛りだ。

TBS取材陣が、「中の島」あたりに見える。トラバースの様子を上からカメラマンが撮影していたところ、当のカメラマンが滑る。なんとか「滑落停止」で止まったからいいものの、危ういところであった。しばらく、動揺が隠しきれないと見え、固まっていた。小屋に戻り、「大貧民・7並べ」をやり、Dは、菊川怜似のK記者特製の「生卵を使っの天井」で、他の登山者から写真を撮られるほどの好評を博した。TBS取材クルーは、18時頃小屋に到着。出演の西尾まりは、久しぶりの山登りだったらしい。

7月21日 (月) 3時起床。4時出発。天気晴れ。飯豊本山への縦走はあきらめ、お花畑が広がる稜線をのんびり楽しみながら、北股岳・門内岳を経由し、扇の地神より梶川尾根を下山。



左から、石川、千田、手塚、富士原



中央が石転び沢

石転び沢が良く見える。

梶川尾根は急峻な下りで、今夏（8月）女性が滑落死している。流行りのダブルストックに頼り過ぎたのが原因ではないかと推測される。梶川尾根もだいぶ下ったところで、雨が降り出し、ずぶ濡れとなる。11時30分飯豊山荘に到着。もう既にバスが来ており、11時35分発とのことで、次のバスは15時30分発。飯豊山荘でひと風呂浴び、ビールで乾杯するはずが、びしょ濡れのままバスに乗り込む。

小国駅に12時30分着。下界は暑い。米沢方面への出発時刻を駅員に聞くと、次の小国駅発代行バスは14時過ぎで、今泉駅での15時6分の接続には間に合わず、乗換えは、18時頃になるとのこと。「今日中に帰れないじゃないか」とバスの乗客は、駅員に詰め寄るも、「自然災害だからしょうがないでしょ」の一点張り。坂町から新潟経由も同様に、今日中に帰れる見込みなし。JR東日本の対応の悪さにうんざりするやらあきれんやら。

結局、今泉までタクシーを利用することとし、運転手さん推奨の温泉「ガマの湯」に入り、「ビールとラーメン」にありつけ、無事、帰京の途についた。

この夏、山岳遭難が相次ぎ、天候不順が多いなか、一瞬の晴れ間を捉え、「飯豊石転び沢」を堪能できたことに感謝したい。しかし、リーダー格の石川がスペインに単身赴任となったため、来夏の合宿が危ぶまれる。TUWV卒業以来30年余り、沢を中心に活動してきた我々としては、来年も報告で。

## 近況報告

### 20期（昭和56年卒）の佐々木晃（ささき農園）です

相変わらず山行はおろか1泊旅行もままならない野菜農家ですが、岩屋（20期）がリーダーとなって2005年から続いている定期的な援農が単調な生活のアクセントになっていて、楽しく田舎暮らしを続けています。2001年に農業を始めた時は幼稚園児だった娘は、数えてみれば120回以上もTUWVメンバーと同じ食卓を囲み、その聲咳に接したおかげで今春大学に進学。今は古女房との二人暮らしですが、これはこれで楽しい(?) のものです。10月には主力のひとりだった石川（22期）が海外勤務になって、来年は戦力ダウンが必至です。マンネリ打開の意味でも、新規メンバーの参加を期待しています。

### 22期（昭和58年卒） 利根川です

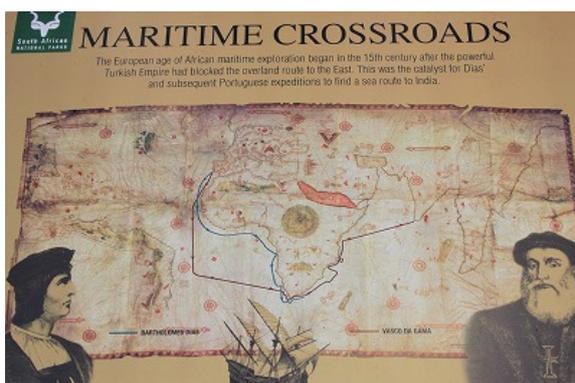
会社生活も30年が過ぎ、経営戦略部門で会社経営に深くかかわる仕事に従事しています。また、青葉工業会（東北大工学部同窓会）宮城支部の幹事、科学技術財団の審査委員、息子の通う私立大学の父母会役員など、TUWVの名簿管理とともに、私自身がお世話になった宮城県や関連大学への恩返しの仕事も多くなってきました。平日、休日とも多忙な日々を過ごしています。

長期連休には、TUWVで覚えた渡り鳥の経験を活かし、できる限り遠くまで羽を伸ばすよう心がけています。今年は、南アフリカと近隣のジンバブエ、ボツアナ、サンビアをまわり、世界3大瀑布であるビクトリアの滝やアフリカ最南端といわれる喜望峰（実際は東南東150km離れたアガラス岬が最南端）を訪問しました。

若く元気うちに...との思いでメキシコ経由にてペルーを夫婦で訪問、天空の都市マチュピチュを散策する機会もありました。高山病はまったく問題ありませんでしたが、帰国途中で訪問したメキシコでは、疲労が原因と思われる下痢や吐き気など小さなトラブルもあり、今となっては笑い話になっています。

また、ロシア情勢が様々気になる中、日本人がなかなか訪問しないエストニア、ラトビア、リトアニアなどバルト3国をまわり、今年は新たに8つの国を訪問する事ができました。

以下、南アフリカ訪問の写真を紹介します。喜望峰訪問の証拠写真（定番の撮影場所）。インド航路をヨーロッパ人として初めて「発見」したヴァスコ・ダ・ガマや世界一周を果たしたマゼランの艦隊（マゼラン本人はフィリピンで死亡）も、この付近を通過しています。TUWVの冬山で私自身を正しい方向へ導いてくれたコンパス（35年間使用）も、水平線に向かい正確に真南を指してくれました。仙台で求めたコンパスは、今でも旅の必需品になっています。



## 新年会のお知らせ

新年会は毎年1月の最終金曜日にいつもの所で行っています。

2015年1月30日(金) 18:00 (会費は8,000円の予定)

新橋駅のすぐ近くにある新橋亭(しんきょうてい)新館(TEL 03-3580-2211)で行います。

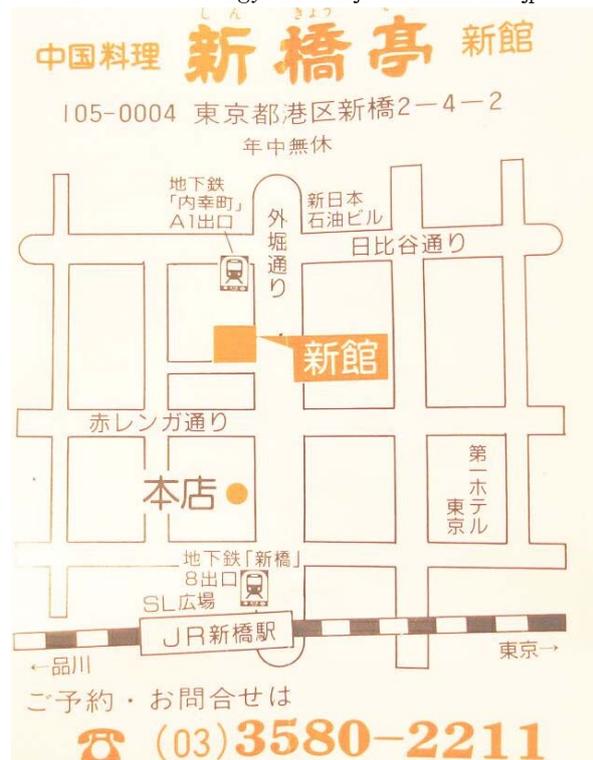
お誘いの上ご出席下さい。特に若い人の出席は大歓迎です。遠くの方でも東京に出張などで来るような場合には、ぜひ出席して下さい。飛び込み大歓迎です。逆に、出席ということになっているのに欠席される方も結構います。これは本当に幹事泣かせ。予定が変わった時は早めにご連絡下さい。

連絡先 佐藤拓哉 Tel 046-841-8622 メール: taku0412.and.ogya1103@jcom.home.ne.jp

### <2013年新年会出席者>

(S39)後藤龍男、松木功 (S40)小原佑一、  
島崎質 (S41)相沢宏保、朝倉肇、桜洋一郎、  
瀬尾勝之、八木真介、横山雄一郎、植松〇〇  
(S42)安達丈夫、加藤邦明、青木祐二  
(S43)石川誠之、大木芳正、大釜寛修、  
菊谷清、藤森英和、真尾征夫  
(S44)小笠原弘三、佐藤拓哉、水上俊彦、  
三原健治 (S45)伊藤健一、原田博夫、  
桃谷尚安 (S46)薄木三生、菅原英行、  
田中康則、野家啓一 (S47)池田重則  
(S48)神山文範 (S49)岡部安水  
(S52)横山登

以上35名



### TUWVOB会 2013年会計報告

(東京口座)

1. 収入	
前回から繰越	361,519
利息	62
計	361,581
2. 支出	
会報 印刷	3,561
送料	2,790
事務用品、通信他	649
次回繰越	354,581
計	361,581

### ★★事務局より★★

- ◇ OB会報45号をお届けします。今回も多くの方から原稿を送っていただき、ありがとうございました。山を続けている人、山から遠く離れてしまった人と様々ですが、同じワングルの飯を食った仲間であることには変わりはありません。
- ◇ メールアドレスが変更になった方は、1ページ目の頭のメールアドレスまでご一報下さい。
- ◇ この会報は原則としてOB会のホームページにアップするだけとし、メールによる配信は行っていません。また、これまでメールアドレスが分からない方には郵送してきましたが、原則として郵送は終了しました。郵送をご希望の方はその旨お知らせください。

佐藤拓哉

239-0801 横須賀市馬堀海岸2-23-14

Tel 046-841-8622

